平成２９年度

平和大使長崎派遣事業報告書

伝えていこう　平和の尊さ
みんなの想い　鶴にのせて

松　戸　市

目　次

平和大使長崎派遣事業にあたって　・・・・・・・・・・・・・・・　１

世界平和都市宣言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２

平和大使長崎派遣募集要項　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３

平和大使名簿　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

平和大使長崎派遣行程　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

平和大使長崎派遣帰庁報告会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１５

平和大使長崎派遣１０周年記念イベント　・・・・・・・・・・・・　１６

平和大使の報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１７

「長崎派遣を終えてみて」　高橋　聖奈　・・・・・・・　１８
「思いやり」　中木　源　・・・・・・・・　２０
「平和への祈り」　見城　希音　・・・・・・・　２２
「本当の幸せ」　角田　結菜　・・・・・・・　２４
「長崎で学んだこと」　旗谷　優衣　・・・・・・・　２６
「長崎へ行き学んで思ったこと」　伊藤　姫那　・・・・・・・　２７
「『あたりまえ』の大切さ」　西田　翼　・・・・・・・・　２９
「核兵器の無い世界のために」　岡村 タイニー 美波　・・　３１
「長崎で学んだこと」　橋本　尚紀　・・・・・・・　３３
「長崎派遣を通じて」　小池　彩華　・・・・・・・　３５
「『平和大使長崎派遣』報告書」　林　隆正　・・・・・・・・　３７
「これからの平和を願って」　永野　礼華　・・・・・・・　３９
「平和大使長崎派遣で学んだこと」　村田　和航　・・・・・・・　４１
「報告書」　榎田　朱里　・・・・・・・　４３
「長崎派遣を終えて」　北山　風香　・・・・・・・　４５
「平和大使長崎派遣」　スッティブン　凛　・・・　４７
「長崎での話を聞いて」　戸田　美智華　・・・・・　４９
「たくさん学んだ長崎」　田中　みなみ　・・・・・　５１
「核や戦争を無くすために」　佐藤　古都　・・・・・・・　５３
「長崎で学んだこと」　松本　歌子　・・・・・・・　５５
「空へと響け、平和の鐘」　中村　葵　・・・・・・・・　５７
「長崎に行って」　堀越　菜々　・・・・・・・　５９

新聞掲載記事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６１

長崎平和宣言（平成２９年８月９日）　・・・・・・・・・・・・・６４

歴代平和大使名簿　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６９

～ 平和大使長崎派遣事業にあたって ～

本市は、世界平和都市宣言を行って以来、毎年様々な平和事業を展開しており、その一つとして「平和大使長崎派遣事業」を実施しております。この事業は２１世紀を担う市内中学生を原爆投下の地である長崎市に「平和大使」として派遣するもので、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学び、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでいただくことを目的としております。平成２０年度に始めた本事業は今年で第１０回目を数え、延べ１９８名を平和大使に任命しました。

さて、今年の８月９日、長崎市平和公園において「被爆７２周年　長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が開催されました。

式典には ５８の国と地域の代表と、約５，４００人の参列者が集まり、原爆犠牲者の冥福を祈り黙とうを捧げました。このことからは、核兵器廃絶を求める声が世界的な流れになりつつあることが感じられます。

そして、長崎市長は式典の「長崎平和宣言」の中で、日本政府に、核兵器禁止条約への一日も早い参加を目指すこと、二度と戦争をしてはならないという非核三原則の厳守を世界に発信し、核兵器のない世界に向けて「北東アジア非核兵器地帯」構想を検討するよう訴えました。また「最も怖いのは無関心なこと、そして忘れていくことです。戦争体験者や被爆者からの平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいきましょう。」と私たちに呼びかけました。

被爆者の平均年齢は８０歳を超え、このままでは被爆体験や戦争体験の記憶は風化してしまう恐れがあります。悲惨な記憶を決して忘れないために、そして戦争や核兵器の無い平和な未来を実現していくために、私たちは、直接体験談を聞くことができる最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、若い世代に継承するということが使命であると考えております。

併せて、世界平和都市宣言における、世界の恒久平和の達成を念願するという理念から、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、様々な角度から、広い視野を持った施策を行う必要があると認識しているところです。

本事業を通して、平和大使が長崎の地で学び感じた被爆の実相や平和の尊さを周りの人に伝え、一歩ずつでも平和な世界、平和な未来に近づくことを願い、今後も本事業を実施してまいりたいと考えております。

～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和６０年３月４日　松　戸　市

• World Peace City Declaration

［英語］

March 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.
This makes our nation determined that history will not be repeated.
All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.
However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.
In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.
We will endeavor to maintain nationwide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.
Therefore, we now declare our city as the “World Peace City”.

City of Matsudo

• 世界平和都市宣言

［中国語］

日本是世界唯一的核弹受难国。
我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。
但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。 面对动荡的世界、松户市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、
高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、
建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

～ 平和大使長崎派遣募集要項 ～

中学生の皆さんへ

世界平和都市宣言事業
第10回「平和大使長崎派遣」大使募集要項

松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

【 平和大使とは 】

・「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言に基づき、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前研修、派遣、事後研修を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

【 対象 】

・市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、裏面の日程にある**事前研修、派遣、事後研修全てに参加できる人**を対象とします。※既に平和大使に任命された方は、対象となりません。

【 定員 】

・22名 （申込者が定員を超える場合は抽選とします。）
　引率 ：松戸市職員4名・添乗員1名

【 費用 】

・市の負担　長崎への往復航空運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、
　　8／7の夕食、8／8、8／9の3食、8／10の朝食、昼食、11／11の昼食
・自己負担　事前研修、事後研修の会場（市内）までの交通費、8／7の昼食など

【 申込方法 】

・参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

【 提出期限 】

・平成29年5月23日（火）までに学校へ提出

【 研修日程 】

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。（自主学習）

7月 2日(日)	9:30～12:00	結団式及び第1回オリエンテーション 青少年ピースフォーラム等の内容説明
7月23日(日)	10:00～15:00	第2回オリエンテーション 戦争、原爆、平和についての自主学習
7月30日(日)	10:00～12:00	第3回オリエンテーション 自主学習とスケジュールの確認

2 派遣研修

(1) 場所 ： 長崎市

(2) 期間 ： 8月7日(月)～8月10日(木) 3泊4日

(3) 内容 ： 青少年ピースフォーラムへの参加等

〈 青少年ピースフォーラム 〉

8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4) 「 平和大使長崎派遣 」日程表

8/7(月)	松戸駅 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル （自主学習）	
8/8(火)	午前	平和案内人のガイドによる被爆建造物見学 〈 場所:原爆落下中心地公園、城山小学校など 〉
	14:00～15:00	開会行事(被爆体験講話など) 〈 場所:平和会館ホール 〉
	15:10～17:20	参加型平和学習(屋内) 〈 場所:平和会館ホール 〉→原爆資料館見学
8/9(水)	午前	平和祈念式典への参列 〈 場所:平和公園 ※人数の都合上、別会場になる可能性がございます。〉
	13:30～15:30	参加型平和学習(屋内) 〈 場所:平和会館ホール 〉
8/10(木)	ホテル → 長崎空港 → 羽田空港 → 市役所帰庁 → 帰庁報告会 → 市役所解散	

3 事後研修

8月31日(木) ※提出期限	平和大使長崎派遣報告書(作文)の提出 派遣研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、平和大使長崎派遣報告書を作成します。
11月11日(土)	松戸市平和事業「平和の集い」に参加します。
12月 3日(日)	平和大使長崎派遣10周年記念事業に参加します。

～ 平和大使名簿 ～

高橋　聖奈	（第一中学校　２学年）
中木　源	（第二中学校　３学年）
見城　希音	（第三中学校　１学年）
角田　結菜	（第四中学校　１学年）
旗谷　優衣	（第四中学校　１学年）
伊藤　姫那	（第五中学校　１学年）
西田　翼	（第六中学校　１学年）
岡村　タイニー　美波	（小金中学校　１学年）
橋本　尚紀	（小金中学校　３学年）
小池　彩華	（常盤平中学校　２学年）
林　隆正	（栗ケ沢中学校　１学年）
永野　礼華	（小金南中学校　２学年）
村田　和航	（古ケ崎中学校　３学年）
榎田　朱里	（牧野原中学校　１学年）
北山　風香	（河原塚中学校　１学年）
スッティブン　凛	（河原塚中学校　１学年）
戸田　美智華	（新松戸南中学校　１学年）
田中　みなみ	（金ケ作中学校　１学年）
佐藤　古都	（和名ケ谷中学校　２学年）
松本　歌子	（和名ケ谷中学校　２学年）
中村　葵	（聖徳大学附属女子中学校　２学年）
堀越　菜々	（専修大学松戸中学校　３学年）

～ 平和大使長崎派遣行程 ～

７月２日（日）

◆結団式・第１回オリエンテーション
（市役所議会棟３階特別委員会室にて）

結団式では各学校から選ばれた平和大使２２名に任命証が交付され、一人ひとり大使としての抱負を発表しました。

オリエンテーションでは自己紹介をするとともに事業の目的や大使の役割を確認し青少年ピースフォーラムの説明を受けました。

〈任命証交付〉

〈平和大使長崎派遣結団式〉

〈オリエンテーション〉

７月２３日（日）

◆第２回オリエンテーション（市役所別館地下１階研修室にて）

長崎派遣に向けて、先輩大使から体験談を話していただきました。現地の様子を知ることで、平和学習に臨む意識が高まりました。また、リーダー・サブリーダーや派遣中のルールなどの必要事項を話し合って決め、コミュニケーションを図りました。

午後はグループになり、それぞれが考える平和について意見交換をしました。そして、グループごとに発表をし「平和大使が考える平和」として、意見を集約しました。

※意見を集約したものは、市主催の平和パネル・ポスター展にて市民の皆様にご覧いただきました。

〈先輩大使の体験談〉

〈リーダーを中心に必要事項決定〉

〈グループワーク〉

〈発表の様子〉

７月３０日（日）

◆第３回オリエンテーション（市役所別館地下１階研修室にて）

長崎派遣のスケジュールと注意事項を確認した後、原爆資料館に献呈する千羽鶴を作るため、各自が折った折り鶴と市民の方々が折ってくれた鶴を糸でつないでいきました。千羽鶴の由来である佐々木貞子さんのお話を踏まえた上で、平和への願いを込めて行いました。

〈スケジュール確認〉

〈千羽鶴作製〉

８月７日（月）

◆９：２４　長崎へ出発

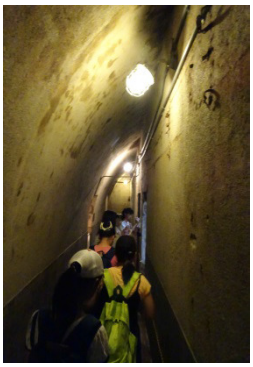
９時００分松戸駅に集合し、出発式を行い、家族や関係者に見送られて松戸駅を出発しました。１２時３０分羽田空港発の日本航空６０９便に搭乗し、１４時２０分長崎空港に到着、バスで長崎市内の宿泊ホテルへ向かい、１６時００分頃ホテルに到着しました。

〈出発式〉

〈羽田空港出発ロビー〉

◆１６：３０　自主学習（立山防空壕見学）

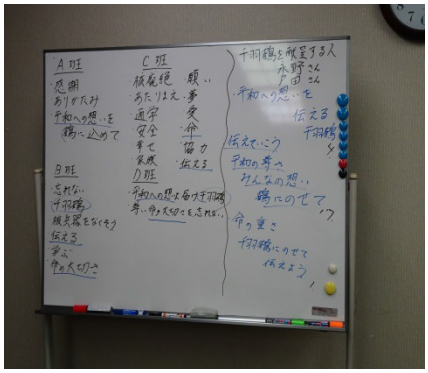
ホテル到着後、徒歩で長崎県防空本部があった立山防空壕に行きました。ここは、戦時中県知事などが警備や救護などの指揮を行っていた場所で、原爆投下時はここから国へ被害情報を伝えたそうです。その役割を管理人の方が説明してくださり防空壕内を見学しました。

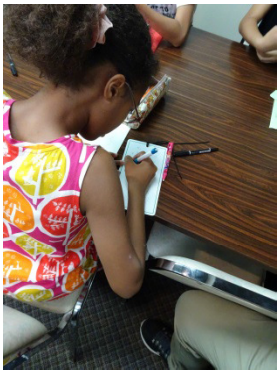


〈立山防空壕〉

◆１９：００　千羽鶴作成（ホテル会議室にて）

原爆資料館へ献呈するため、大使が作製した折り鶴と市民の方々からいただいた折り鶴で千羽鶴を完成させました。また、平和への想いを込めた千羽鶴に添える標語を大使皆で考え**「伝えていこう　平和の尊さ　みんなの想い　鶴にのせて」**に決めました。





〈千羽鶴作製〉　　〈標語が決定し、短冊に想いを込める様子〉

８月８日（火）

◆9：00　自主学習（被爆建造物見学）

朝７時５５分にホテルを出発し、路面電車に乗り、被爆建造物見学へ向かいました。

見学は２班体制で、それぞれボランティアの平和案内人によるガイドのもと、原爆落下中心地、城山小学校、平和公園を約２時間かけて歩いて巡りました。ガイドの方が、当時の悲惨な様子をわかりやすく説明してくれました。熱心に説明を聞きながら貴重な被爆建造物を見学し、当時の状況を学びました。

〈原爆落下中心地碑〉

〈浦上天主堂遺壁〉

〈少年平和像（城山小学校内）〉

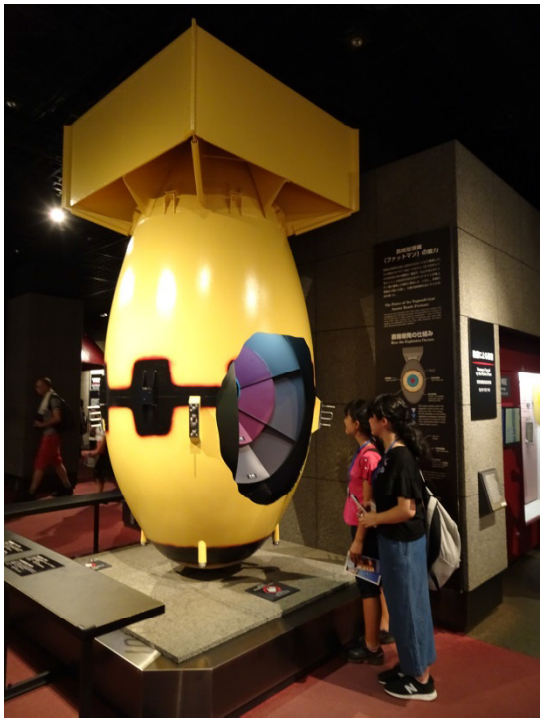
〈被爆校舎（城山小学校平和祈念館）〉

〈平和の泉（平和公園内）〉

〈平和祈念像（平和公園内）〉

◆12：40　自主学習（原爆資料館見学）

昼食後、原爆資料館を見学しました。資料館には原子爆弾の実物大模型や、原爆の被害を受けた物品、被爆された方の写真など、資料がたくさん展示されており、被害の悲惨さを目の当たりにしました。



〈原子爆弾「ファットマン」の実物大模型〉

〈原爆の被害を受けた物品など〉

◆13：30　千羽鶴献呈（原爆資料館にて）

午後は、前日大使が完成させた千羽鶴と、市民の方々からいただいた千羽鶴を原爆資料館に献呈しました。

〈千羽鶴献呈〉

〈松戸市の千羽鶴〉

◆14：00　青少年ピースフォーラム（開会行事）参加（長崎市平和会館にて）

青少年ピースフォーラムには、全国から多くの小・中・高校生が参加しました。開会行事では、地元高校生や大学生の青少年ピースボランティアによる開会宣言、長崎市長挨拶の後、深堀譲治さんによる被爆体験講話を聞きました。

〈開会宣言〉

〈被爆体験講話〉

◆15：10　青少年ピースフォーラム（平和学習）参加（長崎市平和会館にて）

続いて、青少年ピースボランティアの進行による平和学習に移りました。参加者全員がグループ毎に分かれて、自己紹介とレクリエーションで緊張をほぐした後、スライドと紙芝居で被爆の実相を学びました。その後、原爆資料館周辺を巡るフィールドワークに参加し、１日目の青少年ピースフォーラムが終了しました。

〈自己紹介・レクリエーション〉

〈スライド〉

〈紙芝居〉

〈フィールドワーク〉

８月９日（水）

◆１０：３５　平和祈念式典参列（平和公園・原爆資料館ホールにて）

「被爆７２周年　長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」参列の日を迎えました。

朝８時 ４０分にホテルを出発し、大使たちは平和公園で参列する組と原爆資料館ホールで参列する組、２班に分かれて、それぞれ緊張した面持ちで会場に入りました。

厳粛な空気の中、式典が行われ、原爆投下時刻の午前１１時２分、サイレンと長崎の鐘が鳴り響きました。原爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とうを捧げました。

被爆７２周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

式　次　第

10 時 35 分	被爆者合唱
10 時 40 分	開式
	原爆死没者名奉安
42 分	式辞（長崎市議会議長）
46 分	献水
48 分	献花
11 時 02 分	黙とう
03 分	長崎平和宣言（長崎市長）
13 分	平和への誓い
18 分	児童合唱
23 分	来賓挨拶
38 分	合唱 千羽鶴
43 分	閉式

〈平和公園〉

〈平和祈念像〉

〈平和公園での黙とうの様子〉

〈原爆資料館での黙とうの様子〉

◆13：30　青少年ピースフォーラム（平和学習）参加（長崎市平和会館にて）

午後は前日に引き続き、青少年ピースフォーラムに参加しました。グループとなり、前日の平和学習を踏まえて「幸せってなんだろう？」「平和でないときはどんなとき？」を考え、そのうえで「『平和でないとき』を平和にするためには？」をテーマに、意見交換をしました。そして各々が「Ｍｙ平和宣言」を作りました。

グループ発表では、大使たちは班の代表として発表するなど、積極的に取り組みました。

２日間の青少年ピースフォーラムを通じて、全国から集まった同年代の参加者と交流ができ、大変貴重な体験となりました。

〈意見交換〉

〈Ｍｙ平和宣言〉

〈発表〉

〈グループ写真〉

〈参加者集合写真〉

◆19：30　自由学習（グラバー園見学）

青少年ピースフォーラムを終え、夕食後、自由学習に向かいました。

大浦天主堂下を通り、グラバー園を散策しました。グラバー園から見た長崎の夜景は美しく、大使たちの良い思い出となりました。

〈大浦天主堂下〉

〈グラバー園〉

８月１０日（木）

◆8：00　松戸へ出発

４日間お世話になったホテルの方にあいさつし、バスで長崎空港へ向かいました。

１０時１５分長崎空港発の日本航空６０８便に搭乗し、長崎を後にしました。飛行機の中では、各々が帰庁報告会に向けて準備をしました。

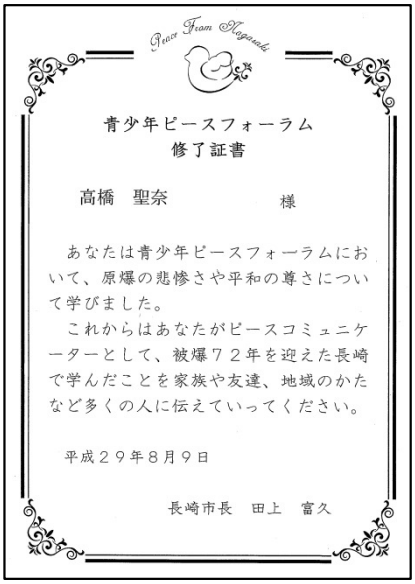
１２時００分羽田空港到着。市の迎えのバスで、市役所へ向かいました。

◆14：30　松戸市役所到着

スムーズに松戸市役所に到着。皆、元気で帰ってくることができました。

帰庁報告会が始まる前に、大使一人ひとりに青少年ピースフォーラムの修了証書が渡されました。

〈修了証書授与〉



Peace From Nagasaki

青少年ピースフォーラム
修了証書

高橋　聖奈　　様

あなたは青少年ピースフォーラムにおいて、原爆の悲惨さや平和の尊さについて学びました。

これからはあなたがピースコミュニケーターとして、被爆７２年を迎えた長崎で学んだことを家族や友達、地域のかたなど多くの人に伝えていってください。

平成２９年８月９日

長崎市長　田上　富久

〈修了証書〉

～ 平和大使長崎派遣帰庁報告会 ～

◆15：00　帰庁報告会（市役所議会棟３階特別委員会室にて）

副市長をはじめ、出迎えてくれた家族に、長崎で見て、聞いて、体験したこと、また派遣を通して新たに感じた平和への思いなどを一人ひとり報告し、４日間の派遣日程を終えました。

〈帰庁報告、副市長の言葉〉

〈青少年ピースフォーラム修了証書を手に集合写真〉

～ 平和大使長崎派遣１０周年記念イベント ～

１２月３日（日）

◆１３：３０　平和大使長崎派遣報告会（松戸市民劇場にて）

今年度、平和大使長崎派遣が１０回目を迎えることから、「平和大使長崎派遣１０周年記念イベント」を開催しました。その中で、大使の役割を果たすべく、長崎派遣を通して学んだことや感じたことを、市民の皆様に報告しました。

スクリーンに映し出した写真などに合わせて、事業の目的や大使の役割、結団式から長崎派遣、そして帰庁報告会までの流れを紹介するとともに、場面ごとに学んだことや感じたことを述べました。

今年で戦後 72 年が経ちました。私たちの周りでは、戦争を実際に体験した方々が高齢になり、少なくなっているため、直接お話を聞くことがだんだん難しくなってきています。

しかし、戦争で命を落とした犠牲者や被爆者の方々の思いを無駄にしないために、そして今後の平和を実現していくために一番重要なことは、私たち平和大使を含めた未来を担う若い世代が、平和への関心を高め、その大切さを代々受け継いで行くことだと思います。

私たちは、長崎で見て聞いて感じた戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さをたくさんの人に伝え、次の世代に、未来の人々に伝えていくよう活動していきます。

平 和 大 使 の 報 告

「長崎派遣を終えてみて」

第一中学校　２年　高橋　聖奈

私は長崎派遣を終えてみて、大きく分けて三つのことが心に残っています。

一つ目は「長崎原爆資料館」を見学できたことです。原爆資料館では当時の写真などがあり、どれも想像を絶するものばかりでした。皮膚がむけてしまっていたり、身元が分からなくなってしまっていたりと目を背けたくなってしまうような写真ばかりでした。原爆資料館では言葉で表せないほどの痛みが伝わり、もう二度と戦争は起こしてはならないと改めて思いました。

二つ目は被爆者の方のお話や朗読を聞くことができたことです。原子爆弾が落ちた後は火の海につつまれてしまった地域があったそうです。「映像だとにおいが伝わらないから本当の怖さは分からない。」と言っていたので原子爆弾はものすごい怖いものなのだと分かりました。原子爆弾は太陽と同じぐらいの温度でとても熱かったそうです。原子爆弾の怖さを改めて知り、心が痛くなりました。被爆者の方は話したくない内容だったと思いますが話してくださったので、たくさんの人に伝えられるよう頑張りたいです。

また、平成２９年７月に核兵器禁止条約を成立することができたそうです。しかし、核兵器を保有している国や核兵器によって守られている国はその条約に反対しているようです。全ての国が賛成しているわけではないので核兵器が無くなるにはまだまだ時間がかかりそうです。いつか核兵器が無くなり、平和な世界に近づくと良いと思います。

最後三つ目は「青少年ピースフォーラム」に参加できたことです。青少年ピースフォーラムでは全国の青少年が集まり、平和についてたくさんのことを考えました。同じ考えの人と別の考えの人がいて、たくさんのことを学ぶことができました。「国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館」では１７８冊の名簿が名簿棚に入っているそうです。その中の一冊は白紙で置かれています。それは、身元が分からなくなってしまった方のために白紙で置かれているそうです。その他にも「原爆資料館の展望デッキ」には当時の写真があり、その中には木や電信柱がそのまま立っている写真もありました。

その他にも長崎に行ってみて多くのことを学ぶことができました。長崎に行く前も戦争はいけないものと分かっていましたが、行った後はその気持ちがより高まりました。このような悲惨な出来事はもう二度と起こしてはならないと思うので、原子爆弾の怖さとつらさを少しでも多くの人に伝えていきます。今回、学んだ全てのことを一生忘れず、今回の経験が平和への第一歩になり、一人ひとりがもっと平和について考えられる世界になることを願っています。

「思いやり」

第二中学校　３年　中木　源

１９４５年８月９日午前１１時２分。一発の原子爆弾が長崎に落とされました。その、たった一発の爆弾で、街は一瞬にして破壊され多くの尊い命を奪いました。そして、今も放射線による後遺症に苦しんでいる人が大勢います。

私は今回、松戸市の平和大使として長崎を訪れました。今の長崎はかつて原爆によって破壊されつくされた場所だとは思えませんでした。私たちが住む松戸となんの違いもなく、どこにでもある普通の街だと思っていました。

しかし、実際に被爆者の話を聞くと、原爆がどれだけ悲惨なものなのかがとてもよく分かりました。防空壕や城山小学校、浦上天主堂などの建物には原爆の威力の大きさをもの語る『傷』がたくさんありました。原爆資料館では思わず目を背けたくなる写真や当時の物がたくさんありました。火傷で皮膚がはがれてしまった少女、丸こげの子どもなど、私と同じくらいの年の子どもの写真もたくさんあり、声が出ませんでした。

「かわいそう。」の言葉も言ってはいけない気がしました。

８月９日の平和祈念式典では被爆者の平和に対する思いや願いがとても伝わってきました。また、平和について幅広い世代の人と話し合う機会がありました。平和だと思うことについて、「学校に行って勉強ができていること。」と言う人がいました。「たしかに」と私も思いました。普段、私たちが

あたりまえにできていることが本当はとても幸せなのだということを学びました。

私は今回の長崎派遣を通して、自分自身が人として成長したと感じました。ルールや時間を守ることができたこともありますが、何より思いやりを持って人と接することができたからです。私は今まで、平和になるためには、戦争を無くす、兵器を作らないなど、大きなことをしなければならないと思っていました。しかし、私は、相手に思いやりを持って接することが平和に繋がることに気が付きました。世界中のすべての人が思いやりの心を持てばいつか平和な世界になるのではないでしょうか。二度と戦争、原爆による悲劇を生まないために、私達若い世代が平和の尊さを発信していくことが大切だと感じました。

世界平和が一日でも早く実現することを願って。

「平和への祈り」

第三中学校　１年　見城　希音

１９４５年８月９日１１時２分、平和な街が一瞬にして消えました。長崎に落とされた原爆はファットマンといい、広島に落とされた原爆（リトルボーイ）より約１．５倍もの威力がありました。

想像していたものよりも大きかったけれど、あの一発で長崎のすべてをうばっていったとは信じられませんでした。

原爆の爆風で人々は吹き飛ばされ、無数のガラスや木片が突きささり、亡くなってしまう人が多くいました。熱線は、原爆落下中心地は３，０００度から４，０００度という高温で１，５００m以上はなれた場所でも６００度という温度だったため、その熱線を浴びた人の皮膚はズルズルと落ち、肉や骨が露出している人が多くいました。原爆落下中心地付近で亡くなった人は、あまりの高温のため一瞬で身体が炭になったと考えられています。放射線は体内の細胞を次々に壊していき白血病やガンになったりして命を落としてしまう人がたくさんいました。

爆風、熱戦、放射線で約７５，０００人もの命が消えてしまいました。語り部さんも家族を原爆で全員亡くしてしまったと言っていました。

毎年８月９日に平和祈念式典が行われています。その時にサイレンが鳴ります。そのサイレンの音を聞くと心が痛くなります。原爆資料館にあるものはどれも目をそらしたくなるようなものばかりでした。

「永遠の１１時２分」という時計がありました。その時計は、１１時２分を指している柱時計です。爆心地から約６００m離れた民家にあったものが爆風で損傷し時計の針は爆発の時刻を指して止まっています。これを見るたび何度も何度も家族が亡くなったことを思い出さないといけないと思うと、私はとても心が痛くてたまりません。

しかし、原爆のことを忘れたら、また同じことが繰り返されて多くの人が亡くなってしまうので、このことを忘れず一人でも多くの人に伝え世界から核兵器が無くなることが全世界共通の願いになればいいなと思いました。

「本当の幸せ」

第四中学校　１年　角田　結菜

「自分は今、不幸せなのだろうか？」

長崎市に平和大使として行かせてもらってから、私はいつも自分に問いかけるようになった。

今までの私は「宿題終わってないっ。最悪。」「あれが欲しい。これも欲しい。」「もっとお金持ちの子に生まれて来たかった。」と、日々の生活に不満ばかり抱いていた。

しかし、長崎市に行って、私の考えは一変した。一発の原子爆弾によって、多くの方々が亡くなったのだ。

１９４５年８月９日午前１１時２分。長崎市に原子爆弾が投下。多くの方が命を落とした。

その日は、久々の配給の日で多くの家の母親が幼いわが子を家に残し、出かけていた。久々のご飯を早く我が子に持って帰ろうとする母親。そんな母を、今か、今かと待っていた子どもたち。そんな日常が一瞬にして消えてしまった。街は子を捜す母と、母を捜す子で溢れ返った。川は水を求めて亡くなった方の死体で溢れ、街の所々に黒く焼けこげた遺体があったそうだ。

私はこの話を聞き、言葉では言い表せない気持ちになった。そして、原爆は「人生」を奪ったのだと考えた。

もし、原爆が落とされなかったら、夢の教師になっていたかもしれない。

良い旦那さんを見つけて、幸せな家庭を築いていたかもしれない。多くの人々の未来が無くなったと聞いて私は「今、自分は不幸せなのか？」と問いかけてみた。たしかに、欲しい物が手に入らないと落ちこんでしまう。しかし、私には支えてくれる家族や友達がいる。それだけで、とても幸せだと思う。

今回、私は長崎市に行って、戦争の悲惨さの他に、本当の幸せということを知った。

「長崎で学んだこと」

第四中学校　１年　旗谷　優衣

私は今回、平和大使として長崎に行きました。

私はそこで心に残ったことが大きく分けて三つあります。一つ目は、原爆資料館でのこと、二つ目は、被爆者である深堀譲治さんの話、三つ目は、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館です。

まず一つ目の原爆資料館では熱線の熱で溶けたビン、目をそらしたくなるような写真の数々、長崎に落ちた原子爆弾の模型などがありました。

次に二つ目の深堀譲治さんの話では、当時の記録は不確実だが、原爆が落とされたところから５００メートル以内は全部灰になってしまって何も残っていなかったと言っていました。

最後に三つ目の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館では、水を欲しがって亡くなった人のために、館の中のどこででも水の音が聞こえるようになっていたり、毎年何千人もの原爆で犠牲となった人の名前が名簿にのったりしています。

このような悲劇を二度と起こさないために今の平和を守ることが私たちのできることだと思います。

「長崎へ行き学んで思ったこと」

第五中学校　１年　伊藤　姫那

私は、長崎へ行き「戦争」や「平和」について学び「皆の思い」を感じることができました。

戦争は、『恐ろしく、皆の幸せをうばうこと』だと思っていました。確かにそうですが、戦争はそのような言葉では伝わらないぐらい悲惨なことです。

多くの幸せと夢をうばった長さ３．２５メートル（女子中学生の約２倍）重さ４．５トン（大人のゾウ約４頭分）、そして、爆風５０パーセント、熱線３５パーセント、放射線１５パーセントという被害をもたらす核兵器は、恐ろしいというより、考えられません。特に私は、熱線３５パーセントで「瓶・麦・米」が、原爆資料館で見た「溶けた６本の瓶」「炭化した麦」「黒くかたまった米」と形が変形したり、食べ物ではなくなってしまったのが印象に残りました。原爆資料館で衝撃を受けたのは「針が１１時２分を指している時計」です。落ちる前まで動いていたのに、悲惨な時間を指して止まっていたので衝撃を受け、悲しみを感じました。

そして「平和」と「皆の思い」は、二つとも同じことだと思います。

ピースフォーラムで被爆者の「深堀譲治」さんが話してくださった話で、私が心に残ったことが三つあります。一つ目が「中学生から軍隊教育を受け、学校から帰ってきてすぐに仕事だった」こと。二つ目は「防空壕や、山に行って生き残っていても放射能で亡くなっている方がたくさんいる」こと。三

つ目は「一ヶ月過ぎてもご飯は芋類・うどん等、米の代わりになる物を主食とし、おかずはない」ということです。中学生で仕事というのも子どもに労働をさせるのはどうかと思いますし、子どもの頃から軍隊教育はやりすぎではないか、と思いました。放射線は、目に見えないので避けようと思っても逃げられないから多くの方が亡くなっていたと聞いて驚きました。ご飯は今のように「一日三食・主食があっておかず付」ではないので毎日の一食一食を感謝していただきたいと思いました。

これは私の考えですが「戦争で、何の罪もない人たちに『友人・家族・好きな人・大切な人』がいて『夢』があったかもしれないのに、核兵器・ミサイルですべて消され、絶望・恐怖・苦しみや悲しみにおそわれる」これ以上の悲惨な出来事はないと思います。そして、過去は戻せないし、変えられない。だけど次の未来はいくらでも変えられる。私に何ができるかわからないけれど、一つでも核兵器・ミサイルが無くせるように、戦争をやっても残るものは何も無いということを世界に広げられるように、外国語を覚えて伝えていきたいです。また、困っている人がいたら笑顔にしてあげて力になれるように全力を尽くしたいです。

「『あたりまえ』の大切さ」

第六中学校　１年　西田　翼

私は平和大使として、四日間、長崎で勉強をしてきました。そこで、平和についてや、核兵器の恐ろしさというものを体感しました。特に、被爆者のお話や、原爆落下時の写真や資料を見て、とても大きな衝撃を受けました。また「あたりまえ」がどれだけ大切なのか、ということも考える機会になりました。

まず、原爆の被害についてです。原爆が落下した８月９日、長崎の街は、夢や希望、普段の生活を失った。飛行機らしい音がして「ドカーン」と爆発した。落ちた時には、灰ばかりで、川に死体が浮いていたり、灰にうもれていたりした。その当時、爆風によって飛ばされたり、熱線や放射線で亡くなったりした人が多かったという。人影もない、もはや地ごくのような景色だった。

私は、被爆された人々がとてもつらい経験をしたのだなあと思いました。家族や親せきなど、大切な人を失った時に、本当の悲しみというものを覚えたのではないかと思います。また、当時被爆者は、差別されたりしました。被爆者は子どもを産んではいけない。結婚してはいけない。全く何の根拠もないのに差別されて制限されるのは、あってはいけないと思いました。他にも、放射線のせいで身体を壊したり、白血病やがんで亡くなったり、たった一発の爆弾で、こんなに被害が出るのは恐ろしく、ショックを受けました。

本当に、本当に、たった一発で多くの犠牲者を出した。「水を・・・。」と求めた人々。助けを求めた人々。戦場に行って、軍隊として戦った人々。そして、暮らしが制限されたこと。これからの社会が、戦争で染まらないでほしい。長崎を最後の被爆地に、誰もが幸せを求めているのだから。もしもまた、原爆が落とされたら、多くの犠牲者を出したり、悲しんだり、後悔したりする。だから私は、核兵器の無い平和な社会になってほしい。

最後に「あたりまえ」がどれだけ重要なのか。いつもの生活が、いつもどおりに行われて、自分らしく生きていけることが幸せ。しかし、今でも内戦やテロ、戦争などが起こっている国がある。だから平和について、多くの人に認識してもらわなければならない。そのために、私にはこれからも平和大使としての役割がある。認識してもらうためには、自分の力で戦争を止めるということは不可能だとしても、感じたことを語ることはできる。過去の過ちを繰り返さないためにも「平和」について、語りついでいくことが大切だと思う。

「核兵器の無い世界のために」

小金中学校　１年　岡村 タイニー 美波

「どうしてだろう」といつも考えていた。世界に核兵器がたくさんあるのは、小学６年生の後半で知っていたし、ニュースでも、時々その話題を耳にしていた。私が平和大使に選ばれたのは、そんな時だった。作文が良かったのか、運が良かったのかは分からないが、ものすごくうれしかった。夜も眠れなかったほどだ。しかし、私が一番疑問に思っていたことは、結局、今回の長崎派遣では分からなかった。それは「どうして意味もないのに核を作るんだろう」ということだった。私が行った長崎派遣で出会った友達は、みんな「核兵器はゼッタイに作ってはいけない」というゆるぎない信念を持っていた。平和大使の人たちも、同じ中学生なのに私以上に立派な考え方を持っていて、少し恥ずかしくなったぐらいだ。長崎だけでなく、広島にも、きっと同じ考え方の人がいるだろう。いや、日本全国にいるに違いない。こんなにも平和を願い、実現しようとしているのに、なぜその声に耳をかたむけてくれないのだろう。学習すればするほど、そのようなことを考えてしまって、なんとなく胸が切なくなった。いくらアメリカの傘に入っているからって、それって自分勝手だな、と思った。今回の派遣で、私は、まだ高校生なのに平和のため努力している方や、つらい過去を必死で話す方など、色々な方に会った。どの方も、とても真剣な顔をしていた。また、溶けたビンやぼろぼろになった服、崩れた建物を見た。どれも見ていて胸が痛くなった。もう二

度と、こんな悲しくて意味の無いことを繰り返してはいけないと、今までで一番強く思った。そういった意味で、この四日間は、私にとってとても意味のある経験になった。戦争や核なんて、ただただ無意味に人を傷つけているだけだ。ムダ以外の何でもない。世界中の人がそういう考え方を持つだけで、世界は今よりずっと良くなるのではないだろうか。私も、今日から少しずつ、自分にできることをやっていこうと思う。一つひとつ、しっかりと。日本を、長崎を、最後の被爆地にするために。

「長崎で学んだこと」

小金中学校　３年　橋本　尚紀

私が長崎で学んできたことや体験したことは、大きく分けて三つあります。

一つ目は、もう二度と戦争をしてはいけないと実感できる場所を訪れたことです。立山防空壕は、他の防空壕とは違い、長崎県知事がいたため知事室や防空監視隊本部などが配置されていて、県の防空施策の中心的役割を担っていたそうです。私は、県知事の方も不安や恐怖という感情があったと思います。しかし、県知事は原爆が落とされるまで会議をしていたそうなので、県民のために努力していたのだなと、心を動かされました。

城山小学校は、爆心地から５００メートルという近さの場所にあり、もっとも爆心地に近い国民学校だったそうです。校庭の横には、とても立派な桜が植えられていました。その桜は嘉代子桜と呼ばれていて、桜が植えられた理由は、聞くだけで胸がグッと圧迫されるような、悲しいものでした。私は、桜を見たら嘉代子桜のことを思い出して、周りの人に伝えていこうと思いました。

二つ目は、青少年ピースフォーラムについてです。ここでは戦争や核について学んだり、平和について考えたりしました。被爆した方からその当時の様子を聞くこともできて、とても良い経験になりました。また、グループワークとして、他の県の人たちとも交流することができました。アメリカとフランスと中国とロシアは、まだ核兵器を持っているそうなので、いつか核兵

器の無い世界が実現すると良いなと思います。

三つ目は、長崎原爆資料館についてです。ここでは、戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを、展示物から感じることができます。その中でも私が一番印象に残っているのは、溶けた６本の瓶です。これは爆心地から約４００メートルの場所で発見されたそうなのですが高熱のため瓶が溶けてくっついてしまっていて、瓶を溶かしてしまうほどの熱を浴びた人が大勢いると考えると、それだけで胸が痛くなります。

私は長崎でたくさんのことを学ぶことができました。だから、これからは周りの人に伝えていかなくてはなりません。平和大使の一員として、核の無い世界を目指し平和な未来を築いていこうと思います。

「長崎派遣を通じて」

常盤平中学校　２年　小池　彩華

現在、日本では原爆を体験した人が徐々に少なくなってきています。私たちにとって、被爆体験者の話を聞いたり、平和祈念式典へ参加したりすることは普段の生活ではできないとても貴重な体験だと思いました。また、事前学習や資料を見るよりも実際に被爆体験者の方の話を自分の耳で聞いている方が、戦争の悲惨さや命の尊さなどが伝わりました。被爆体験者の方は「生きている限り、一人でも多くの人に伝えたい。このようなことは二度と起こしてはならない。」と言っていました。その一言には強い熱意を感じました。しかし「感情的になってしまってもしょうがない。けれども、涙は絶対に流しません。」と、つらいのをたえて話してくださっていました。このことは、私の心にすごく残り、原爆について忘れてはいけない、次の世代になっても語りつがれ、原爆についての重みを感じなければならない、と思いました。

原爆についてつらく悲しんでいる人は現在もたくさんいます。私はこのことについてあまり考えることはありませんでした。しかし、私たちが長崎へ派遣された日は、台風の後でとても暑い日でした。このような日に約５００メートル上空で原爆が爆発し、原爆直下の地表は３，０００から４，０００度もの熱線と秒速約４４０メートルの爆風があったのです。そして、私たちはその地に立ちました。立っている地中には、たくさんの人の遺骨が埋まっ

ています。私たちはそこを歩きました。そこは、７０年経っても草花は生えないと言われていました。しかし、本当にそこは原爆が落ちたとは思えないほど草花がとてもきれいに咲いていました。

私たちは、過去のとても悲惨な戦争について教科書で学ぶことだけで良いのでしょうか。考えて学ぶだけでは意味が無いと私は思います。なぜなら、実際に被爆地へ行って見ないとわからないことがたくさんあったからです。まずは、実際に原爆が落とされたことを知り、戦争の恐ろしさや核兵器の実態、それまでずっと当たり前にあった場所、当たり前にあった幸せな生活など、無くなって初めて気づく当たり前のすばらしさを知る。

今がどれだけ平和で安全に過ごせているか考え、それに感謝し、今後、二度と戦争を繰り返してはならないと、私は今、ここでうったえます。

「『平和大使長崎派遣』報告書」

栗ケ沢中学校　１年　林　隆正

僕は今回「平和大使」として長崎で学んだことが二つあります。

まず一つ目は、核兵器がもたらす被害は被爆者から家族や友人を奪うだけではなく、かろうじて生き残った人々の心と体に決して癒えることのない後遺症を残すということです。

原爆によるエネルギーの１５パーセントを占める放射線は生き残った人々の体を白血病や癌でむしばみ、ほんの僅かな生きる希望さえも残しません。次に熱線は３５パーセントを占め、原爆投下地点から１．５キロメートル付近でも６００度以上で、原爆投下地点周辺にいた被爆者は体中の皮膚や目を溶かされ、人であった面影さえも奪われます。そして最後に５０パーセント、つまり２分の１を占める爆風は、原爆投下範囲１キロメートルで秒速百１６０メートル、１．５キロで秒速９４メートルでした。原爆投下時、爆風は建物の窓という窓を割り、被爆者をもの凄い勢いで吹き飛ばし、多くの死亡者は、壁に押しつけられていたり、おびただしいガラスの破片が突き刺さっていました。このように被爆者の方々は、たった一発の原爆の炸裂により、全てを失い、生き延びた人の悲しみも決していえない深い心の傷となって今も残っています。

そして二つ目は、決して原爆の被害を忘れてはいけないことと、それを次の時代に伝え、この日本を最初で最後の被爆国にしないといけない。という

ことです。

長崎には、山王神社の「一本柱鳥居」や、キリスト教信者により完成された「浦上天主堂」など、原爆投下当時にあった物を今も残し、原爆の被害の恐ろしさや核兵器による被爆国を日本で最後にしなければならないという、原爆に対する心構えが示されています。

だから、僕たちは「平和大使」として、原爆の恐ろしさを深く知り、忘れず、原爆に対する心構えを持って、次の時代へ伝え、被爆国は日本で最後にしなければいけない、と深く感じました。

このことから、僕たちは「平和大使」として学んだことを今後、家族や友達を通じてたくさんの人に伝えていきたいと思います。

「これからの平和を願って」

小金南中学校　２年　永野　礼華

私は長崎に行って、たくさんのことを見て聞いて学びました。原爆が落ちてから７２年経った今でも、その悲惨さを物語っている物がたくさんありました。その中には、目をそらしたくなるような物もたくさんありました。背中にやけどを負った少年や顔半分にやけどを負った人の写真、原子爆弾の模型などがありました。これらを見ると、１９４５年８月９日当時の状態がよく分かりました。午前１１時２分、周りがいきなり光り、それとほぼ同時に、爆風が吹きました。原爆で一番の威力は爆風だったそうです。その次は熱線です。その温度は約３，０００度から４，０００度にまで及んだそうです。次の被害の原因は放射線です。これらにより、１５万人程の人が死傷しました。

現在、核兵器は世界で約１５，０００個も残っていると言われています。日本に原爆が落とされて、その悲惨さが分かっているにも関わらず、７２年前の原爆の何万倍という威力を持っています。

被害の中で、熱線の被害を受けた方々が一番悲惨だと思いました。太陽と同じ熱を持っています。人が作れる熱の温度は何百度が限界だと言われているのに、これだけの熱を持っていれば、触れてしまえば焼けてしまい、皮がはがれ血がたれてきます。今の私たちはこの温度を体験することはできません。してはいけないのです。体験するということは、原爆がまた落とされる

ということです。もう二度とそんなことが起きてはいけません。日本が、最初で最後の被爆国で終わることを私たちは願います。

世界の中には核を無くそうと頑張っている人々がいます。それにより「核兵器禁止条約」を結びました。それには１２２カ国の賛成で採択されていますが、賛成でない国もあります。後者は核があることによって国が守られていると思っているようなので、世界中にある核を無くそうとするのはとても大変です。しかし、私たちが協力して世界中の核を無くしていければと思います。

私は青少年ピースフォーラムに参加して、平和であることがどれだけありがたいか分かりました。戦時中にあった音を再現していて、その音を、目を閉じて聞くと、ぞっとしました。被爆者の方に実相を聞き、さらに世界中の人々が平和に暮らすことができるように願いました。そのためにも、平和活動などに参加し、核を世界から無くしていきたいです。

「平和大使長崎派遣で学んだこと」

古ケ崎中学校　３年　村田　和航

平成２９年５月に学校で平和大使長崎派遣関係のプリントが配布されました。友達が応募しているのを見て私も少し興味を持ちました。家に帰ってプリントを見ると私も行ってみたくなりました。翌日先生に応募の相談をして、応募しました。応募するには自己紹介となぜ行きたいのか作文を書いて提出します。

６月４日、松戸市役所での平和大使長崎派遣抽選会がありました。古ケ崎中学校からは３人が応募し、抽選をした結果、私が当選しました。

それから７月２日、２３日、３０日とオリエンテーションがありました。２日には自己紹介をし、２３日では係決めをして、サブリーダーになり、平和大使を代表して平和大使の活動を紹介するラジオに出演することができました。

派遣当日、９時に松戸駅ギャラリーに集合し、羽田空港へ行きました。１時間半の飛行を終え長崎に到着して、ホテルに着き、最初に、立山防空壕を見学しました。中はとても涼しく防空壕として使っていたとき、照明は暗かったそうです。

派遣二日目には、平和公園や城山小学校や原爆資料館を見ました。平和公園には平和祈念像というとても大きな像がありました。城山小学校では、校歌の「子らのみ魂よ」が流れていました。原爆資料館では、長崎に投下され

た原子爆弾ファットマンの落とされたあとの街を見て、とても大きなショックを受けました。

二日目の午後には、青少年ピースフォーラムに参加しました。ピースフォーラムとは、全国の学校の代表が集い、平和なときや、平和だと思わないときについて班内で意見交換をし、意見交換したものを全国の生徒の前で発表をする行事で、二日間に分けて行いました。私は、意見を出している方だと思いました。

三日目には平和祈念式典に参加しました。そして、ピースフォーラム二日目の発表では全国の生徒の前で発表することができたので良かったです。

派遣された四日間で、原爆資料館の見学や被爆体験者の講話を聞き、戦争の恐怖や悲惨さを学びました。特に、被爆体験者である深堀譲治さんの「戦争はだめだ。若い人に同じ不幸を味わってほしくない」という言葉に心を打たれました。

この先も戦争について学んでいきたいです。

「報告書」

牧野原中学校　１年　榎田　朱里

私は、今回の長崎派遣で日本国内なのに知らないことがたくさんあることを実感しました。１９４５年８月９日午前１１時２分のたった一発の爆弾により多くの命が奪われ、生き残っても大切な家族、友人が亡くなったり放射線を浴びて身体や心に傷を負い７２年経った今でもたくさんの人が苦しんでいます。この事実を知った時、私は戦争を望んでもいない人たちがなぜ巻き込まれなくてはならないのだろうと心が痛くなりました。

ピースフォーラムでは、音で現代と昔（長崎・広島に落とされた原子爆弾）との爆弾の威力の差を比べることがありました。すると断然現代の方が強いということが、すぐに分かりました。私は、今までテレビでミサイルや核実験でさわいでいることを、あまり大変だとか思ったことがありませんでした。しかし、この音の違いを聞いた瞬間今まで気にしていなかった自分に驚きました。もしもこんなに強い核兵器が日本に飛んできたら、そう思うとより一層怖くなってきました。長崎や広島で大きな被害を与えたのは核兵器です。たくさんの死者や負傷者を出しました。そのような恐ろしい兵器を、自分の国を守るためや、自分たちの利益のために持つ国がたくさんあり一向に核兵器が無くならず、脅しに使っています。私は、そんなに核兵器を持って普通でいられるというのは核兵器の怖さを全く知らないからだと思います。また、自国のためと言ってたくさんの命が失われるのが怖いと思わないからだと

思います。核兵器の恐ろしさを知っているのは唯一の被爆国の日本だけだと思います。しかし、日本も核兵器によって守られていたり、核兵器の無い世界を目指してリーダーシップをとると言っておきながら核兵器禁止条約の交渉会議に出席しないそうです。日本が、核兵器について真剣に考えなくては平和な世界はなかなか築けないと思います。

私は、長崎に行き初めて核兵器についてたくさん考えられたと思います。私たちは次の世代に核兵器の恐ろしさ、８月６日、８月９日のことを伝える必要があると改めて考えることができました。

「長崎派遣を終えて」

河原塚中学校　１年　北山　風香

私は、原爆についてもっと知りたいと思い、平和大使長崎派遣に応募しました。長崎で学んだことを松戸に持って帰るという目的を持ち、長崎派遣に臨みました。

私は、ピースフォーラムでの被爆者の方の話にとても衝撃を受けました。その方は原爆が落ちた瞬間、辺りはピンク色の光に包まれ、真っ赤な雲、真っ黒な雲、真っ白な雲になった後、元に戻った、と言っていました。それを、別の人は「地上に太陽が現れた様だった」と言っていました。それを受けた人は、すさまじい熱線と爆風で亡くなったようです。火の海が治まった被爆地は何も無い道に遺体がそこらじゅうに転がっていたそうです。しかし、それを話してくれた人は涙も出なかった、と言っていました。それは、おそらくその瞬間感情が無くなったのだと思います。それ位、恐ろしいことだと知り胸が痛くなりました。

もう一つ、印象に残ったことがあります。原爆資料館には、原爆が落とされた当時の様子がありました。まず、目に飛び込んできたのは皮膚が溶けた写真です。強い熱線で皮膚が溶けて、中の骨が見えていて、目をおおいたくなりました。それを見ると改めて戦争は二度と起してはいけないと、強く感じます。また、そこには、実際に長崎に落とされた原子爆弾の「ファットマン」がありました。ファットマンは「太っちょ」という意味らしく、名前の

通りの模型でした。その爆弾は温度３，０００から４，０００度、秒速４４０メートルで中心地から５００メートル付近は灰だけにしてしまう程の威力を持っています。それはどのようなことなのだろうか。考えただけで恐ろしいことです。

そして、私は平和祈念像の意味を教えてもらいました。天を指す右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は長崎の未来を示しているそうです。それはとても深い意味があるのだと思いました。「やはり、どのような人でも原爆に対する思いは一緒なのだ」と感じることができました。

私はこの派遣を通してたくさんのことを学ぶことができました。そして、それを今以上にもっと、たくさんの人に伝えていきたいです。実際、この夏休みに私が祖母に伝えた時は「ありがとう。勉強になった。」と言われたので、もっとありがとうを集めて、もっと多くの人に原爆のことを知ってほしいです。そしてこれからも、今以上に「平和の輪」が大きくなるとうれしいです。そのためにもっと、原爆の悲惨さ、平和の尊さをたくさんの人に伝えていきたいです。

「平和大使長崎派遣」

河原塚中学校　１年　スッティブン　凛

私は今回「平和大使長崎派遣」に応募しました。なぜ私が応募したのかというと、もともと戦争については学校の授業で習っていました。その頃から戦争について少し関心があったので「太陽の子」という本を読みました。その本には、戦争のことが書かれていました。そして、私はもっと戦争について知りたいと思い今回応募しました。

私は、長崎に行き、印象に残ったことが三つあります。

一つ目は、長崎に着いて初めて見た、戦争によって傷つけられた物の数々です。熱により全身真っ黒になった少年、顔の半分の皮膚がただれてしまった少女の写真、１１時２分に止まった時計。一つひとつの物が同じ人間が傷つけたとは思えないくらい衝撃的でした。

二つ目は、次にピースフォーラムに参加した時のことです。被爆者の深堀譲治さんの話で分かったことは、原爆は映像だとにおいなどが分からず恐ろしさが伝わらないということでした。

他にも、原爆は太陽と同じくらい熱い、何も考えずに過ごす平凡な時が幸せ、とのことでした。二日目のピースフォーラムで私が特に覚えている場所は「国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館」です。ここは原爆によって死亡した人の名前が一人ひとり書かれている紙が大切に保管されています。途中の通り道は木でできていて、とても戦争の重みが感じられました。

そして、最後は「平和祈念式典」です。最初に聴いた「もう二度と」という歌は、歌詞にある一つひとつの言葉が戦争のことを物語っていて力強さを感じ、心から平和を願っていると思いました。その後、１１時２分に黙とうをしました。

そして、深堀好敏さんの平和への誓いを聞きました。当時１６歳の深堀さんが見た鮮明な光景、平和公園の横を流れる川に折り重なった死体は、想像するだけでも恐ろしいと思いました。

私は四日間を通して学んだことがたくさんあります。たとえば、原爆は人の心を深く傷つけるくらい恐ろしいということ、そして、戦争は二度と起こしてはいけないということです。このことを通して、自分には何ができるか考えてみました。それは、長崎に行って見たもの、聞いたことを伝えることです。年々、当時を語ることができる被爆者の人数は減ってきています。だから、次は自分たちが次の世代に伝えていこうと思います。そして日々の平和を願い生活していこうと思います。

「長崎での話を聞いて」

新松戸南中学校　１年　戸田　美智華

長崎に行った時のことを報告します。

８月８日、ピースフォーラム一日目に参加しました。そこで被爆者の深堀譲治さんのお話を聞きました。

当時深堀さんは１４歳で、学徒報国隊として被爆地から３，３００メートルの場所で被爆し、家族４人を亡くしたそうです。私だったらたえられないことばかりでした。

原子爆弾の被害は広範囲に渡り、あらゆる人や建造物が失われたそうです。

原子爆弾の威力は、５０パーセントが爆風、３５パーセントが熱線、残りの１５パーセントが放射線だそうです。

爆風や熱線も恐ろしいものですが、私が一番恐ろしく感じたのは、放射線です。なぜなら、放射線は目に見えず、水の中や空気中に溶け込んでしまうからです。溶け込むこと自体は恐ろしくないのですが、放射線は人に害をおよぼします。例えば、放射線が溶け込んだ水を飲めば、体の中に放射線の物質が入ってしまい、亡くなってしまいます。

深堀さんの話を聞いた後、全体を複数の班に分けて、フィールドワークに行きました。そこでは、原爆資料館の展望デッキや、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館に行きました。祈念館では、入り口に水が流れています。その由来は、水を求めて亡くなった方が多いから、だそうです。

祈念館の中に入ると、空気が冷たく感じました。そして、とあるガラス張りの場所がありました。そこには長く細い棚が並んでおり、その中に死没者の人達の名前を書いた名簿を入れているそうです。しかし、白紙の名簿を一冊入れておくそうです。理由は、身元や名前が分からない死没者の人達の分です。私はそれを聞き、身元や名前が分からない人たちのことも想って用意するのだな、と思いました。

８月９日、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典へ参列をしました。私たち松戸市からは式典会場では７人が参列できました。私は参列することができて、貴重な経験をすることができました。

他にも、二日間のピースフォーラムなど、絶対に普段できない経験をさせていただきました。

「たくさん学んだ長崎」

金ケ作中学校　１年　田中　みなみ

７２年前の８月９日、一発の原子爆弾で大きな被害を受けた長崎に、私はこの夏、松戸市の平和大使として訪れました。そして、全国から集まった平和大使や、現地のピースボランティアの方々と交流をしたり、見学を通して、たくさんのことを学ぶことができました。その中でも、特に心に残ったことが二つあります。

一つ目は、ピースフォーラムでお話を聞いた、深堀譲治さんのお話です。深堀さんは、１４歳のときに被爆されました。そして、原爆により母、二人の弟、そして幼い妹を亡くしました。家族は別々のところで被爆したそうです。

やっと見つけた家族はすでに亡くなっていました。しかし、その姿を見てもあまりのことに泣けなかったそうです。もし、私の家族がそのような状態になったらと思うと、胸が痛くなります。つらい過去であり、できることなら忘れてしまいたいことを、私たちに詳しく教えてくださったので、私たちもこのことを忘れず次世代に伝えていくようにしていきたいです。

二つ目は、平和な社会をつくるということは、大変なことではないと気付いたことです。私は長崎へ行く前、平和な社会をつくるということは、とても大変だと思っていました。政治家になって社会を変える、そういったことだと思っていました。しかし、意見交換などをして、相手の気持ちを考える、

思いやりを持って行動をするなど、とても小さなことでもみんなで気を付ければ大きなものになり、平和な社会をつくる第一歩になると思うようになりました。私は今何ができるのかを考え、毎日が楽しく過ごせていることに感謝していきたいです。

最後になりますが、私に平和について学ぶきっかけや、貴重な体験をさせてくださったことに感謝をし、これからの生活に生かしていきます。そして長崎へ行って終わりではなく、これからも平和について学んでいきたいです。平和について考えている中学生がたくさんいると分かったので、みんなと協力をし、平和な社会に一歩でも近づけるように努力をしていきます。本当にありがとうございました。

「核や戦争を無くすために」

和名ケ谷中学校　２年　佐藤　古都

私が長崎に行って感じたことは、戦争や核の恐ろしさです。派遣される前も、恐ろしいということは理解していたつもりでしたが、原爆資料館や原爆落下中心地などで見学した時、恐ろしいという言葉では表現しきれない程の恐ろしいもので、驚きの連続でした。被害の規模や今までの長崎の歩み、被爆者、遺族の平和への思い、二度と癒えることない人々の身と心の傷など、現地でしか学べないようなことを、たくさん学ぶことが出来ました。

その内容について報告したいと思います。

まず、青少年ピースフォーラムでは、全国の平和大使が集まり、平和とは何かを一緒に考え、たくさんの考えを共有することができた貴重な時間でした。

また、平和祈念式典では、いろいろな形で平和を訴えようとする被爆者や、遺族の方々の姿に心を打たれました。例として、歌に想いをのせて伝えたり、二度と思い出したくない過去を何度も何度も言葉を詰まらせたり涙ぐみながらも話し、伝えて下さいました。

そして、原爆資料館では、実物があったり、皮膚がただれてはがれていたり、首や頭にがれきが刺さっている写真など、あまりにも衝撃的な物ばかりで普段使っている、かわいそう、つらそう、大変そうなどの言葉では、片付けられないような気がしました。自分がいつかそうなったとしたらと思うと、

恐ろしくて言葉になりません。

そのような過去があってから７２年もの月日が経ち、長崎の街は、元の姿を取り戻しました。被爆者の高齢化が進み、被爆者の方々やその時代を生きた人の話を聞けるのも、私たちの世代が最後です。だから次世代を担う私たちが、伝え、平和を呼びかけ、国を築いていかなくてはなりません。そのために私たちが今からでもできることは、やはり、伝えることだと思います。私たちだけで解決できることではありません。ですが、一人でも多くの若者が核や戦争の恐ろしさについて知り、少しでも多くの人々が反核、反戦の意識をもってほしいと思います。

伝え、知り、無くすということが、原爆で亡くなった方へ、私たちが出来る、最後の供養なのだと思います。だから、私自身も現地で感じたこと、涙があふれてきそうな現実を少しでも多くの人に伝えていきます。

そしてみなさんに一つだけお願いがあります。どうかこの事実を忘れないでください。多くの尊い命を一瞬にして殺めていった核兵器と、人々を深い悲しみに包んだ戦争を。この悲劇をどうか忘れないでください。

このように感じさせてくれる貴重な時間をあたえて下さり感謝しています。ありがとうございました。

「長崎で学んだこと」

和名ケ谷中学校　２年　松本　歌子

私は今回平和大使として長崎に行って、今まで母や祖母に聞いたことや本に書いてあったこと以外のたくさんのことを知ることができました。

青少年ピースフォーラムでは、平和についてグループで考えたり、被爆者の方の話を聞いたりしました。

被爆者の深堀譲治さんの話を聞きました。深堀さんは、１４歳で被爆して、原爆により家族を亡くしてしまいました。この話を聞いて、「その時、自分や家族がそこにいたら。」と考えると、とても心が痛くなりました。また、被爆直後の原爆直下の地上の温度は、３，０００度から４，０００度もあったということや、今、世界にある核は、長崎に落とされた物をはるかに上回る威力があるということも知りました。

平和学習では、戦争・原爆の恐ろしさや被害について学びました。原爆のエネルギーは、５０パーセントが爆風、３５パーセントが熱線、１５パーセントが放射線ということを知り、驚いたのと同時にどれ程の被害が長崎の人達を苦しめたのだろうと思いました。

原爆資料館では、当時の写真や使われていた食器や服などがあり、原爆の被害の様子が想像できました。黒コゲになってしまったお弁当、強い熱線で人の影が残った柱、ひどいヤケドで重症を負ってしまった人の写真など、思わず目を背けてしまいそうな物がたくさんありました。

この他にも、旧城山国民学校や平和祈念式典での被爆者合唱や被爆者の方の話を聞いてさらに、関心が深まりました。

私は、人々の命を無差別に奪っていっただけではなく生き残った人たちの大切な家族や人生も奪ってしまった戦争・原爆は、二度と繰り返してはいけないと思いました。

現在、被爆者の平均年齢は８０歳を超えています。私たちがこうして直接話を聞ける機会は、少なくなってきています。

実は、私がこの長崎の平和大使に応募した一番のきっかけは、曾祖父が被爆者だったことです。曾祖父は死体処理に召集されて長崎で被爆しました。島原からは、二人だけだったそうです。被爆で苦しんだという話を小さい頃から母や祖母からたくさん聞いていました。今回、長崎の平和祈念式典に参列して、曾祖父が体験したこの場に立てたことは、私にとって貴重な機会となりました。

私は、今回学んだことを生かして、家族や友達に伝えていきたいと思います。そして、恐ろしい原爆の事実が忘れられないように、次世代へつないでいこうと思います。

「空へと響け、平和の鐘」

聖徳大学附属女子中学校　２年　中村　葵

長崎へ行き感じたことは、坂道が多いということです。そこで、長崎の歴史を江戸時代までさかのぼり調べてみると「長い岬」が長崎の源だと知りました。海に囲まれた長崎は開港により外国からも人々が集まり畑や丘に家が建ち、坂道の多い街に変わっていったそうです。今回私たちは、南山手町にあるグラバー園へ行きました。異国情緒あふれる長崎の美しい夜景を観る限りは、７２年前の地獄のような風景を私は想像することができませんでした。

１９４５年８月に投下された二つの爆弾は一瞬にして多くの命を奪いました。広島と長崎の爆弾の威力をＴＮＴ換算により比較すると、広島の高濃縮ウランは高性能火薬の約１万５，０００トンに相当し、死者は約１４万人でした。それに対して、長崎のプルトニウムは約２万２，０００トンに相当し、死者は約７万４，０００人でした。長崎に投下された原爆の方が威力が大きかったにもかかわらず、死者は広島の約二分の一でした。防空壕を案内する方の話によると、山が多く平地が少ない地形が関係しているそうで、自然の偉大な力を感じました。

原爆は大きく分けて三つの被害をもたらしました。放射線と爆風と熱線です。熱線により、原爆直下地表は４，０００度にもなりました。人々は全身を焼かれ、瀕死の状態で水を求め、苦しみました。平和祈念式典での献水は、平和の泉をはじめ、長崎市内東西南北の井戸水や湧き水を採水したものです。

亡くなる時に水が飲めなかった無念の思いを、清らかな水を捧げることにより、少しでもやわらげてほしいと思いました。式典会場である平和公園内の「長崎の鐘」は、恒久平和の響きを伝えるだけでなく、もう二度と戦争を繰り返してはならないという警鐘だと思います。この鐘は、一人では鳴らすことができません。数人でロープを引いて鳴らすものです。私はこの鐘を鳴らしたときに、みんなで心を一つにすることが大切だと思いました。７２回目の原爆忌に平和の鐘を鳴らしたことを忘れず、長崎の歴史や原爆の実相を一緒に学んだ仲間と共に第２の語り部となれるよう、勇気を持って自らの言葉で伝えていきたいと思います。

「長崎に行って」

専修大学松戸中学校　３年　堀越　菜々

私は今年の夏に、松戸市の平和大使として長崎に派遣されました。

どうしたら平和になるのか、戦争の恐ろしさや悲惨さを学びたいと思い、平和大使に応募しました。

長崎に行くまで、私の中で戦争とは、歴史の教科書や本の中の話で、あまり現実にあったこととは感じていませんでした。しかし、長崎に行き戦争が起こったのは昔の話ではなく、現在日本が平和だからといって絶対に忘れてはいけない、風化させてはいけないものだと改めて思いました。

長崎で一番印象的だったのは被爆者の方のお話です。昨日まで元気だった兄弟が放射線によって突然亡くなってしまった話や、家族を失った時に涙も出なかったということが印象的でした。戦争の恐ろしさを博物館などで見るより、身近に感じられました。家族を失い、苦しい思いをした恐ろしい経験の話を聞いて、二度と戦争を繰り返してはいけないと思い、大切な人と一緒にいられることがどれほど幸せなことなのか、改めて考えさせられました。

また、長崎と私の住む町では、戦争への意識が全然違うことも感じました。長崎には、平和を願うモニュメントや、戦争の歴史の博物館なども多くあり、平和について身近に感じられるような街でした。訪問した城山小学校の生徒が、毎日登下校時に、平和の像に一礼していることや、月に一回平和学習があることを知り、驚きました。同じ国なのに、こんなにも平和や戦争に対す

る意識が違うことを知り、私たちももっと学んでいかなければいけないと思いました。

青少年ピースフォーラムでは、戦争の恐ろしさ、平和とは何なのか、どうしたら平和になるのかを考えました。

長崎に投下された原子爆弾の威力と、現在世界中にある核兵器の威力をＢＢ弾の音で例えたものを聞きました。長崎の音はポツンと、とても小さな音でしたが、現在の世界中にある核兵器の音は、とても長く大きい音でした。ただのＢＢ弾の音なのに、とても恐ろしく感じました。長崎の爆弾を模した音はあんなに小さな音でも、とても多くの人の命を奪ったので、現在の核兵器の音の大きさでは、地球を壊してしまうのではないかと思いました。そこで、絶対に核兵器を使ってはいけないと改めて思いました。

また、平和とは何なのか考えた時に、平和とは「世界中の人が幸せを感じること」という話になりました。一人ひとりが意識すれば、直接的には平和に繋がらなくても、今よりも平和なより良い世界になるのではないかと思うようになりました。私は「思いやりを持って人と接し、感謝の気持ちを忘れずに伝える」ということを意識しようと思います。

被爆者の平均年齢が８０歳を超えている今、私たちが生の声を聞ける最後の世代だと思います。だからこそ私たちが学び、戦争の悲惨さや、平和の大切さを伝えていく必要があると思います。そこで、今回学んだことを伝えたり、行動に移し、平和な世界にするために、少しでも貢献したいと思います。

新聞記事

平成２９年７月７日（金）
千葉日報（結団式）

松戸市　中学生22人、長崎派遣へ

平和の尊さ 学び伝える

平和大使を委嘱され、長崎に派遣される松戸の中学生＝２日、松戸市役所

松戸市は2日、長崎市の平和記念式典に派遣する中学生22人を平和大使に任命した。同市役所で行われた。8月7～10日に長崎を訪問し、9日の平和記念式典にそろって出席する。

10回目の長崎派遣となる今年は、市内19中学校から46人が応募。抽選などで22人が選ばれた。伊藤純一教育長は「平和には、自分と違う考えを受け入れる力が大切。長崎で身に付けて」と求めた。

平和大使に任命された第二中3年の中木源さんは「長崎で学ぶことを、青年海外協力隊で平和貢献に生かしたい」と話した。

平和記念式典では、千羽鶴を献呈して原爆犠牲者を追悼し、原爆資料館を見学するなど戦争の悲惨さや平和の尊さを学ぶ。栗ケ沢中1年の林隆正さんは「写真や文章では伝わらないものを学びたい」と意気込む。

派遣から戻ると、11月11日に松戸市内で開かれる平和の集いで派遣報告に臨むなど広報の役割も。金ケ作中1年の田中みなみさんは「体験を私自身の言葉で身の回りの人に語りたい」と話し、専大松戸中3年の堀越菜々さんは「核兵器や戦争の恐ろしさを学び、多くの人に伝えたい」と意欲を示した。

新聞記事

平成２９年８月２７日（日）
松戸よみうり（帰庁報告会）

長崎に派遣された中学生の平和大使

核兵器のない世界に

平和大使長崎派遣　帰庁報告

7日から10日まで市内の中学生22人で結成された「平和大使」が長崎を訪れ、平和祈念式典などに参列。平和の尊さを再認識した。

「平和大使」は中学生を対象に、長崎市が各自治体に呼びかけ、毎年実施しているもので、松戸市は2008年の初参加以来今年が10回目の派遣となる。

戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを学ぶことと、被爆者への追悼を目的に、青少年ピースフォーラムに参加し、被爆者から体験談を聞いたほか、各地の参加者と意見交換をした。

「平和大使」には19校から46人の応募があり、抽選で22人が選ばれた。10日には牧野英之副市長、伊藤純一教育長、深山能一市議会議長、木村みね子副議長、長崎市長の前で帰庁報告を行い、22人がそれぞれ感想を述べた。

聖徳大学附属女子中学校2年の中村葵さんは「今回長崎に行って私は大きく分けて2つのことを学びました。まず1つ目は戦中や戦後に人々がなった病気についてです。原爆資料館に行ったとき、人々は熱線や火により体の皮がはがれてしまったり、熱さで水を求めるあまり、川に落ちたりして亡くなる記録を見ました。私は地獄のような絵や写真を見て言葉を失いました。今でも白血病に悩まされている人がいると聞き、戦争は絶対繰り返してはならないと思いました。次に2つ目は今でも多くの国がミサイルを持っているということです。日本は72年前に戦争でいろいろなものを失ったのに、ミサイルなどの核に守られているなどと考えると、被爆者の方々のことを思い、心が痛くなりました。世界から完全に核を無くすというのは、とても難しいことだと思います。でも、今回青少年ピースフォーラムで学んだように、一人ひとりが平和にしようという気持ちを持っていれば、平和になると思いました」と話した。

12月3日には、平和大使長崎派遣報告会が予定されている。「平和大使長崎派遣10周年記念事業」として、今年の大使をはじめ過去10年間に派遣された大使が、長崎派遣を通して感じたこと、学んだことを市民に伝える企画が計画されている。

【戸田　照朗】

平成２９年９月２０日（水）
朝日れすか（帰庁報告会）

松戸市

平和を願う心は一つ
中学生の「平和大使」長崎へ

松戸市の中学生22人が「平和大使」として8月7日から10日まで、被爆地の長崎市を訪れ、平和祈念式典やピースフォーラムなどに参加。戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを学び、被爆者の貴重な証言を聞き、全国の参加者たちと意見交換を行った。10日の松戸市役所で行われた帰庁報告会では、一回り成長した様子で派遣の体験を発表した。

中学生たちは「平和について学び、原爆の本当の恐ろしさを知った。今の生活がどれくらい幸せかを考えました」、「核兵器は一瞬にして大変多くの命を奪い、まだ苦しめています。こういうことがないよう沢山の人に伝えて行きたい」、「日本を最後の被爆国にしなくてはいけない」など、それぞれが記憶を受け継ぐ決意を語った。報告を受けた牧野英之松戸副市長は「経験したことを後世に残すために頑張って下さい」と激励した。

松戸市は平成20年度から平和大使を派遣。今年が10回目で、市内19校46人の応募があり、抽選で22人が選ばれた。

今回、平和大使10周年記念事業の一環として12月3日、市民への報告会を開催予定。この派遣を通し中学生が感じたこと学んだことを発表する。

▲副市長に報告する平和大使

▲松戸に到着後、市役所での報告会

新聞記事

平成２９年１１月３日（金）
ちいき新聞（平和大使長崎派遣報告会）

平和の大切さを考える

「地球のステージ」と長崎派遣中学生の活動

好評の「地球のステージ」を今年も上演

世界平和都市宣言を1985年に行って以来、平和の大切さをさまざまなイベントを通して市民に訴え続けてきた松戸市。戦争体験の風化が懸念された2008年からは、次世代への継承の大切さから市内の中学生長崎派遣事業を開始。その平和大使たちの体験を、さらに広く市民の平和を求める心とつなげられるように、平和大使報告会とNPO法人「地球のステージ」の舞台を合わせた、「平和の集い」を毎年開催してきた。

「地球のステージ」は、世界の紛争、震災の地で医療支援活動を展開してきた医師・桑山紀彦氏が、活動映像に歌と語りを交えた六つのステージを順次公演しているもの。多くの人の感動を呼び、松戸市では9年連続公演中だ。今年は、パレスチナ紛争や震災被災地での活動を含む「地球のステージ4」を上演する。

また、昨年から歴代平和大使、まつど国際文化大使、市内の留学生などで、文化、国籍、年齢の違いを超えて平和について意見交換をする「ピースセッション」も始めた。昨年に続き、今年もその成果を、平和への音楽とメッセージに込めて「平和の集い」で伝える。

平和大使長崎派遣10周年記念イベント

松戸市の平和大使長崎派遣は今年で10年を迎えた。派遣された平和大使は、今年派遣され平和祈念式典やピースフォーラムに参加してきた22人を加えて、計198人。10周年を記念し、今年の平和大使報告会は、歴代平和大使や特別講師も加えた特別イベントとして開催される。

次世代につなげられた声がしっかり市民全体に共有された時、それが平和への大きな礎になっていくことだろう。（F）

●平和の集い「地球のステージ4」・「ピース&ミュージックセッション」
日時／11月11日（土）午後1時（午後0時30分開場）
●平和大使長崎派遣10周年記念イベント
日時／12月3日（日）午後1時30分（午後1時開場）
場所／松戸市民劇場ホール（松戸市本町11の6）
定員／300人　料金／無料（当日先着順）
問い合わせ／TEL047（366）7305　松戸市総務部総務課

平成２９年１１月１５日（水）
東京新聞（平和大使長崎派遣報告会）

松戸市 中学生の被爆地・長崎派遣10年

歴代の平和大使 思い聞いて

来月3日に記念のイベント

戦争体験を通して、核兵器の非人道性や平和の尊さを学んでもらおうと、松戸市が市内の中学生を平和大使として被爆地長崎に派遣して、今年で十年になった。これを記念して市は、平和大使による発表や講演会を十二月三日午後一時半から松戸市民劇場で開く。

市は二〇〇八年から毎年八月に中学生を長崎市に派遣。生徒は、九日に松山町平和公園で実施される「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に参列するほか、被爆体験に耳を傾けてきた。今年も二十二人が現地を訪れ、平和大使は十年間で計百九十八人になった。

当日は今年の大使が現地で見聞きし、感じたことを報告する。また、歴代の平和大使たちがこれまでの活動を動画にまとめて上映、平和を願って作詞作曲した合唱曲を披露する。

これに先立ち、松戸市出身で駐クウェート特命全権大使などを経て現在、広島平和文化センター理事長の小溝泰義さんが講演する。小溝さんは、米国のオバマ大統領（当時）を広島平和記念資料館に迎え、今年、ノーベル平和賞を授賞した国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）主催のミーティングに出席した。核に依存しない世界の実現に向け市民ができること、主婦の読書活動が原水爆禁止を求める署名運動のうねりへとつながった例などについて話す。

長崎原爆資料館で千羽鶴をささげる平和大使の中学生＝8月8日、長崎市で（松戸市提供）

定員三百人。入場無料。問い合わせは市総務課＝電047（366）7305＝へ（平日のみ）。（林容史）

以下、平成２９年８月９日　被爆７２周年　長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典式次第から抜粋

長 崎 平 和 宣 言

「ノーモア　ヒバクシャ」

この言葉は、未来に向けて、世界中の誰も、永久に、核兵器による惨禍を体験することがないように、という被爆者の心からの願いを表したものです。その願いが、この夏、世界の多くの国々を動かし、一つの条約を生み出しました。

核兵器を、使うことはもちろん、持つことも、配備することも禁止した「核兵器禁止条約」が、国連加盟国の６割を超える122か国の賛成で採択されたのです。それは、被爆者が長年積み重ねてきた努力がようやく形になった瞬間でした。

私たちは「ヒバクシャ」の苦しみや努力にも言及したこの条約を「ヒロシマ・ナガサキ条約」と呼びたいと思います。そして、核兵器禁止条約を推進する国々や国連、ＮＧＯなどの、人道に反するものを世界からなくそうとする強い意志と勇気ある行動に深く感謝します。

しかし、これはゴールではありません。今も世界には、15,000発近くの核兵器があります。核兵器を巡る国際情勢は緊張感を増しており、遠くない未来に核兵器が使われるのではないか、という強い不安が広がっています。しかも、核兵器を持つ国々は、この条約に反対しており、私たちが目指す「核兵器のない世界」にたどり着く道筋はまだ見えていません。ようやく生まれたこの条約をいかに活かし、歩みを進めることができるかが、今、人類に問われています。

核兵器を持つ国々と核の傘の下にいる国々に訴えます。

安全保障上、核兵器が必要だと言い続ける限り、核の脅威はなくなりません。核兵器によって国を守ろうとする政策を見直してください。核不拡散条約（ＮＰＴ）は、すべての加盟国に核軍縮の義務を課しているはずです。その義務を果たしてください。世界が勇気ある決断を待っています。

日本政府に訴えます。

核兵器のない世界を目指してリーダーシップをとり、核兵器を持つ国々と持たない国々の橋渡し役を務めると明言しているにも関わらず、核兵器禁止条約の交渉会議にさえ参加しない姿勢を、被爆地は到底理解できません。唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約への一日も早い参加を目指し、核の傘に依存する政策の見直しを進めてください。日本の参加を国際社会は待っています。

また、二度と戦争をしてはならないと固く決意した日本国憲法の平和の理念と非核三原則の厳守を世界に発信し、核兵器のない世界に向けて前進する具体的方策の一つとして、今こそ「北東アジア非核兵器地帯」構想の検討を求めます。

私たちは決して忘れません。1945年８月９日午前11時２分、今、私たちがいるこの丘の上空で原子爆弾がさく裂し、15万人もの人々が死傷した事実を。

あの日、原爆の凄まじい熱線と爆風によって、長崎の街は一面の焼野原となりました。皮ふが垂れ下がりながらも、家族を探し、さ迷い歩く人々。黒焦げの子どもの傍らで、茫然と立ちすくむ母親。街のあちこちに地獄のような光景がありました。十分な治療も受けられずに、多くの人々が死んでいきました。そして72年経った今でも、放射線の障害が被爆者の体をむしばみ続けています。

原爆は、いつも側にいた大切な家族や友だちの命を無差別に奪い去っただけでなく、生き残った人たちのその後の人生をも無惨に狂わせたのです。

世界各国のリーダーの皆さん。被爆地を訪れてください。

遠い原子雲の上からの視点ではなく、原子雲の下で何が起きたのか、原爆が人間の尊厳をどれほど残酷に踏みにじったのか、あなたの目で見て、耳で聴いて、心で感じてください。もし自分の家族がそこにいたら、と考えてみてください。

人はあまりにもつらく苦しい体験をしたとき、その記憶を封印し、語ろうとはしません。語るためには思い出さなければならないからです。それでも被爆者が、心と体の痛みに耐えながら体験を語ってくれるのは、人類の一員として、私たちの未来を守るために、懸命に伝えようと決意しているからです。

世界中のすべての人に呼びかけます。最も怖いのは無関心なこと、そして忘れていくことです。戦争体験者や被爆者からの平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいきましょう。

今、長崎では平和首長会議の総会が開かれています。世界の7,400の都市が参加するこのネットワークには、戦争や内戦などつらい記憶を持つまちの代表も大勢参加しています。被爆者が私たちに示してくれたように、小さなまちの平和を願う思いも、力を合わせれば、そしてあきらめなければ、世界を動かす力になることを、ここ長崎から、平和首長会議の仲間たちとともに世界に発信します。そして、被爆者が声をからして訴え続けてきた「長崎を最後の被爆地に」という言葉が、人類共通の願いであり、意志であることを示します。

被爆者の平均年齢は81歳を超えました。「被爆者がいる時代」の終わりが近づいています。日本政府には、被爆者のさらなる援護の充実と、被爆体験者の救済を求めます。

福島の原発事故から６年が経ちました。長崎は放射能の脅威を経験したまちとして、福島の被災者に寄り添い、応援します。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、核兵器のない世界を願う世界の人々と連携して、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2017年（平成29年）８月９日

長崎市長　**田　上　富　久**

以下、長崎平和宣言（ことばの解説）から抜粋

1.「ノーモア　ヒバクシャ」

1982（昭和57）年、長崎で被爆した山口仙二さんが被爆者の代表として国連で行った演説の中で、「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ヒバクシャ」と訴えました。これは、二度と核兵器による惨禍（さんか）を繰り返してはならないという被爆者、そして被爆地の核兵器廃絶運動の原点を表した言葉です。

2．核兵器禁止条約を推進する国々

国連加盟国のほとんどは核兵器を持たない国々です。

核兵器は一旦使用されたら地球に大きな被害を与えるだけでなく、存在する限り、誤って使われたり、テロなどに使われる危険性があります。その危険な核兵器を法的に禁止しようとする動きが核兵器を持たない国々の間で、2010（平成22）年頃から高まってきました。そして、そのような国々の主導のもと、三度にわたって核兵器の非人道性を考える国際会議の開催や、国連で核兵器の非人道性に関する決議が採択されました。これらの国々は今年３月に国連で始まった核兵器禁止条約に向けた交渉会議でも中心的役割を果たしました。

3．15,000発近くの核兵器

長崎に落とされた原爆は、通常火薬の約21,000トンの量に相当する威力があったといわれています。

一方で現代の核兵器は、その数倍から数百倍の威力を持つものまであります。

核兵器保有国が持っている核弾頭は、使用できる状態にあるもののほか、ミサイルから取り外されているものの、再び使用できるよう保管されているものも含めると、アメリカ6,800発、ロシア7,000発、イギリス215発、フランス300発、中国270発となっており、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮などの推計も合わせると、世界中に約14,900発の核弾頭があるといわれています。

【核兵器禁止条約を巡る動き】

1995 年（平成 7）年 11 月　核兵器使用の違法性を問う国際司法裁判所の審理で長崎市長が意見陳述

1996（平成 8）年 7 月　国際司法裁判所が「核兵器の使用は国際法に一般的に違反する」と勧告

2010（平成 22）年 4 月　国際赤十字委員会総裁が核兵器の非人道性に基づきその法的禁止の必要性と廃絶を訴える

2011（平成 23）年 11 月　国際赤十字・赤新月運動代表者会議で、核兵器の非人道性を踏まえた核兵器廃絶の決議

2013（平成 25）年 3 月　第 1 回「核兵器の非人道性に関する国際会議」がノルウェーで開催

2014（平成 26）年 2 月　第 2 回「核兵器の非人道性に関する国際会議」がメキシコで開催

2014（平成 26）年 12 月　第 3 回「核兵器の非人道性に関する国際会議」がオーストリアで開催

2016（平成 28）年 2 月、5 月、8 月
核軍縮に関する国連作業部会が開催され、2017 年に条約の交渉会議の開始を勧告する報告書を国連総会に提出

2016（平成 28）年 12 月　国連総会で条約の制定交渉会議を 2017 年に開始することを求める決議文を採択

2017（平成 29）年 3 月　条約の制定交渉会議が始まる

2017（平成 29）年 7 月　条約の制定交渉会議で核兵器禁止条約が賛成多数で採択

2017（平成 29）年 9 月　国連総会で条約の調印開始

4．核の傘の下にいる国々

相手国が攻撃してきた場合、核兵器で反撃するという姿勢を見せることによって相手国の攻撃を思いとどまらせようとすることを、核兵器の抑止力といいます。しかし、抑止力に固執すると、お互いに相手国より強力な核兵器を保有したり開発しようとしたりするために、核の拡散につながり、逆に核兵器による攻撃の危険性が高まる可能性があります。

日本や韓国、NATO（北大西洋条約機構）の諸国は、いずれも核兵器は保有していませんが、アメリカの持つ核兵器の抑止力を「核の傘」に例えて、その抑止力に依存している国々です。

これに対し、核兵器の抑止力に頼らない方法で国の安全を保障しようとする考え方を、「非核の傘」といいます。長崎市は、その現実的で具体的な方法として、北東アジア非核兵器地帯（７で解説）を提案しています。

５．核不拡散条約（NPT）

核不拡散条約（NPT）は、核保有国が増える（核が拡散する）ことを防ぐ目的でつくられた条約で、1970（昭和45）年に発効しました。2003（平成15）年１月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中で、インド、パキスタン、イスラエル、南スーダンの４か国を除く191か国・地域が加入しています。

主な内容は、以下の３つです。

（１）「核不拡散」

1967（昭和42）年１月時点で核兵器を保有していたアメリカ・ロシア・イギリス・フランス・中国の５か国だけに核兵器の保有を認め（核兵器国）、それ以外の国（非核兵器国）が保有することを禁止しています。

（２）「核軍縮」

核兵器国には、核兵器の撤廃に向けた交渉を誠実に行うことを求め、非核兵器国には核兵器の製造、取得などを禁じています。

（３）「原子力の平和的利用」

非核兵器国には、原子力の平和利用が認められており、核関連施設や核物質が秘密裏に軍事転用されていないことを明らかにするために、国際原子力機関（IAEA）の検査を受ける義務があります。

・再検討会議

核不拡散条約（NPT）では、条約が定める義務の履行状況を確認し、締約国の取り組みを強化するため、５年毎に再検討会議と、その間に３回から４回の準備委員会が開催されます。

2015（平成27）年の再検討会議は、４月27日から５月22日までアメリカ・ニューヨークの国連本部で開催されました。最終文書は採択されないまま閉幕しましたが、参加国の多くが核兵器の非人道性に言及し、核兵器禁止に向けた法的枠組みについての議論を速やかに開始すべきであると訴えました。また、「被爆地訪問の重要性」が多くの国々に支持され、今後につながる会議となりました。

2017（平成29）年５月２日から12日まで、オーストリア・ウィーンで2020年の再検討会議に向けた第１回準備委員会が開催されました。核軍縮、不拡散をめぐる厳しい国際情勢が指摘される一方、核兵器禁止条約交渉という追い風を受けて核軍縮の前進に期待する声も上がりました。次回再検討会議の成功をめざした国際社会の努力が進んでいます。

６．非核三原則

非核三原則とは、核兵器を「持たない」「つくらない」「持ち込ませない」という被爆国である日本政府の３つの原則のことです。

1967（昭和42）年12月、当時の佐藤栄作首相が国会で表明しました。1971（昭和46）年11月の衆議院で沖縄返還に関連して、初めて国の方針として、国会の意思を決める決議が行われました。

７．「北東アジア非核兵器地帯」

地域の国々が条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束した地域のことを「非核兵器地帯」といいます。この条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることにもつながります。地球の南半球は、1967（昭和42）年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか４つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器条約）によって、すでに陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、1998（平成10）年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009（平成21）年には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非核兵器地帯条約が発効されています。

「北東アジア非核兵器地帯」とは、日本と韓国と北朝鮮の３か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約が実効力を持つためには、３か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国（アメリカ、ロシア、中国）が、３か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

北朝鮮の核を早急に放棄させるためにも、北東アジア非核兵器地帯の実現に向けて、日本政府や韓国政府が主導していくことが必要です。

８．72年経った今でも、放射線の障害が被爆者の体をむしばみ続けています。

原爆による放射線障害は、急性障害と後障害にわけられます。急性障害は大量の放射線を浴びたときに出る症状で、嘔吐（おうと）、下痢、発熱、皮下出血などを発症し、多くの人が死亡しました。後障害は、被爆して数年から数十年してから現れる症状で、がんや白血病、白内障（はくないしょう）などがあります。1946（昭和21）年初めから、火傷が治ったあとが盛り上がるケロイド症状が現れました。また、母親の胎内で被爆した胎内被爆児は出生後も死亡率が高く、死を免（まぬが）れても小頭症（しょうとうしょう）などの症状が現れることもありました。さらに、1950（昭和25）年頃からは、白血病、甲状腺がん、乳がん、肺がんなど様々な病気の発生率が高くなり始めました。

放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ十分に解明されておらず、調査や研究が今も続けられています。

９．平和首長会議

1982（昭和57）年、核兵器廃絶と世界平和を目指して結成された世界の都市による平和団体です。会長は広島市長、副会長は、長崎市長ほか14都市が務めています。

現在、加盟都市数は162カ国・地域、7,417都市が加盟しており、その人口は世界の総人口の７分の１に当たる10億人に及んでいます。（2017（平成29）年８月１日現在）。

平和首長会議では、2020年までの核兵器廃絶を目標に様々な活動を世界各地で取り組んでいます。そして４年に１度、加盟都市が集まって、行動計画などについて話し合う総会を広島市と長崎市が交互に開催しています。

今年は長崎で、「『核兵器のない世界』の実現を目指して～2020年に向けて、今、私たちができること～」を基調テーマに、「第９回平和首長会議総会」が８月７日から10日まで開催されます。

～ 歴代平和大使名簿 ～

年度	No.	氏名	（学校名）
平成二十年度（二〇〇八年）	1	熊川　実旺	（第四中 2年）
	2	別宮　賢治	（第五中 2年）
	3	渡邊　ちさと	（六実中 3年）
	4	片野　結依	（小金南中 1年）
	5	清水　のどか	（古ケ崎中 1年）
	6	藤井　彩乃	（新松戸南中 2年）
	7	清水　健人	（金ケ作中 1年）
	8	神部　莉奈	（新松戸北中 2年）
	9	山本　拓実	（旭町中 3年）
	10	黒木　若葉	（聖徳大学附属中 1年）
平成二十一年度（二〇〇九年）	1	川本　景介	（第一中 1年）
	2	鈴木　亜加里	（第二中 1年）
	3	小幡　祐太	（第三中 1年）
	4	山田　政明	（第四中 1年）
	5	清水　彬奈	（第五中 1年）
	6	久佐野　美奈子	（第六中 1年）
	7	増野　友梨奈	（小金中 2年）
	8	井山　陽菜	（常盤平中 2年）
	9	小林　美幸	（栗ケ沢中 1年）
	10	熊川　大揮	（六実中 1年）
	11	髙島　里夏	（牧野原中 3年）
	12	西　志穂	（河原塚中 3年）
	13	工藤　颯人	（根木内中 1年）
	14	四家　明宜	（金ケ作中 1年）
	15	児島　一華	（和名ケ谷中 1年）

年度	No.	氏名	（学校名）
平成二十二年度（二〇一〇年）	1	櫻井　和奏	（第一中 2年）
	2	吉田　彩乃	（第二中 1年）
	3	三橋　若奈	（第三中 1年）
	4	笹本　幸輝	（第四中 2年）
	5	比嘉　祐哉	（第五中 2年）
	6	後藤　奈穂美	（第六中 1年）
	7	神部　ちひろ	（小金中 2年）
	8	田中　萌加	（常盤平中 1年）
	9	髙梨　望	（栗ケ沢中 2年）
	10	岸田　穣士	（六実中 2年）
	11	大山　祭	（小金南中 1年）
	12	渡邉　誠嗣	（古ケ崎中 2年）
	13	梶浦　美樹	（牧野原中 2年）
	14	斉藤　温人	（根木内中 1年）
	15	富永　由也	（河原塚中 1年）
	16	石井　拓海	（新松戸南中 2年）
	17	中川　剛志	（金ケ作中 1年）
	18	向田　美紀子	（和名ケ谷中 3年）
	19	山本　ありさ	（旭町中 2年）
	20	新倉　花菜	（小金北中 1年）
	21	田村　陽香	（聖徳大学附属女子中 2年）
	22	染谷　日向子	（専修大学松戸中 1年）

年度	No.	氏名	（学校名）
平成二十三年度（二〇一一年）	1	佐藤　萌加	（第一中 2年）
	2	発地　空介	（第三中 1年）
	3	岸　健太	（第四中 1年）
	4	宗像　未来	（第五中 1年）
	5	天野　七海	（第六中 1年）
	6	紙崎　莉緒	（小金中 2年）
	7	井山　祥樹	（常盤平中 2年）
	8	加藤　円来	（栗ケ沢中 1年）
	9	鈴木　理花子	（六実中 3年）
	10	坂本　実優	（小金南中 1年）
	11	谷口　茉奈美	（古ケ崎中 1年）
	12	對馬　あい子	（牧野原中 2年）
	13	山田　真平	（河原塚中 2年）
	14	新垣　峻太	（新松戸南中 3年）
	15	水谷　春来	（金ケ作中 2年）
	16	長谷川　結友	（旭町中 3年）
	17	板倉　日向子	（小金北中 1年）
	18	張　敏	（聖徳大学附属女子中 2年）
	19	平野　瑞帆	（専修大学松戸中 2年）

年度	No.	氏名	（学校名）
平成二十四年度（二〇一二年）	1	阿部　秀大	（第一中 2年）
	2	茂出来　美樹	（第二中 3年）
	3	小澤　美羅	（第三中 3年）
	4	笠原　卓斗	（第四中 1年）
	5	播磨　渚生	（第五中 3年）
	6	内海　渚	（第六中 1年）
	7	大津　みちる	（小金中 3年）
	8	小俣　さやか	（常盤平中 1年）
	9	佐藤　優海香	（常盤平中 1年）
	10	阿部　裕美	（六実中 1年）
	11	宮本　龍一	（小金南中 3年）
	12	樋口　杏	（古ケ崎中 1年）
	13	高橋　あみ	（牧野原中 2年）
	14	遠藤　未羽	（根木内中 2年）
	15	後藤　陽	（河原塚中 1年）
	16	鈴木　里歩	（新松戸南中 2年）
	17	岩﨑　いぶき	（和名ケ谷中 1年）
	18	伊藤　梢	（和名ケ谷中 3年）
	19	紀藤　颯斗	（旭町中 1年）
	20	川村　香奈美	（小金北中 1年）
	21	石井　そら	（聖徳大学附属女子中 2年）
	22	中山　皓一郎	（専修大学松戸中 1年）

年度	No.	氏名	（学校名）
平成二十五年度（二〇一三年）	1	藍原　由梨奈	（第一中　1年）
	2	河野　圭吾	（第二中　1年）
	3	福田　友郁	（第三中　2年）
	4	旗谷　幸亮	（第四中　1年）
	5	宮島　健吾	（第五中　3年）
	6	後藤　美菜	（第六中　3年）
	7	関川　美海	（小金中　2年）
	8	金澤　春樹	（小金中　1年）
	9	阿部　雅治	（常盤平中　3年）
	10	中澤　有稀	（栗ケ沢中　2年）
	11	加藤　一紗	（六実中　1年）
	12	島田　悠	（小金南中　1年）
	13	大久保　愛深	（古ケ崎中　1年）
	14	緑間　喜子	（古ケ崎中　1年）
	15	毎熊　和正	（牧野原中２年）
	16	猪瀬　柊斗	（牧野原中　１年）
	17	奥野　智朗	（河原塚中　3年）
	18	平野　茜	（新松戸南中　1年）
	19	下藤　誉司	（和名ケ谷中　1年）
	20	新倉　拓真	（小金北中　1年）
	21	郡司　萌	（聖徳大学附属女子中　2年）
	22	星　さりあ	（専修大学松戸中　1年）

年度	No.	氏名	（学校名）
平成二十六年度（二〇一四年）	1	布川　恭大	（第一中　2年）
	2	白井　悠生	（第二中　2年）
	3	松本　優樹	（第二中　2年）
	4	本間　宏明	（第三中　2年）
	5	旗谷　吏紗	（第四中　3年）
	6	宮島　加奈子	（第五中　1年）
	7	植田　聖杜	（第六中　2年）
	8	合田　健太郎	（小金中　2年）
	9	早﨑　諒	（常盤平中　2年）
	10	小井土　瑠冴子	（栗ケ沢中　1年）
	11	望月　優衣	（六実中　3年）
	12	片野　玲奈	（小金南中　1年）
	13	和田　晴人	（古ケ崎中　2年）
	14	對馬　悠介	（牧野原中　2年）
	15	井手　麟太郎	（根木内中　2年）
	16	樋口　明日香	（河原塚中　1年）
	17	斎藤　龍秀	（新松戸南中　1年）
	18	久保田　美咲	（和名ケ谷中　2年）
	19	紀藤　菜桜	（旭町中　1年）
	20	渡邊　龍	（小金北中　1年）
	21	野中　利悦	（聖徳大学附属女子中　2年）
	22	築田　真理子	（専修大学松戸中　3年）

年度	No.	氏名	（学校名）
平成二十七年度（二〇一五年）	1	服部　叶汰	（第一中　1年）
	2	瀬谷　恭平	（第二中　2年）
	3	長谷川　勇矢	（第三中　2年）
	4	朝生　蘭	（第四中　1年）
	5	田島　歩夢	（第四中　3年）
	6	佐藤　駿太	（第五中　1年）
	7	小林　優人	（第六中　2年）
	8	山下　優月	（第六中　2年）
	9	田﨑　和	（常盤平中　1年）
	10	須藤　巧	（小金南中　1年）
	11	萩原　真央	（小金南中　1年）
	12	大久保　敦康	（古ケ崎中　1年）
	13	倉重　はるか	（古ケ崎中　2年）
	14	清水　智也	（牧野原中　2年）
	15	木村　史来	（牧野原中　1年）
	16	吉田　真帆	（河原塚中　1年）
	17	飯銅　千尋	（和名ケ谷中　2年）
	18	井上　未来	（旭町中　2年）
	19	島岡　里帆	（小金北中　1年）
	20	藤井　友紀	（聖徳大学附属女子中　2年）
	21	山田　佳那	（聖徳大学附属女子中　2年）
	22	福島　有香	（専修大学松戸中　3年）

年度	No.	氏名	（学校名）
平成二十八年度（二〇一六年）	1	梶原　望音	（第一中　1年）
	2	新井　しほり	（第二中　2年）
	3	山本　遥香	（第三中　2年）
	4	大住　春紀	（第四中　1年）
	5	塙　悠莉乃	（第五中　1年）
	6	三橋　世那	（第六中　1年）
	7	山﨑　夏海	（小金中　2年）
	8	千葉　京香	（常盤平中　1年）
	9	須藤　未来	（小金南中　1年）
	10	坂本　聖	（小金南中　2年）
	11	相馬　結子	（古ケ崎中　1年）
	12	中村　莉子	（古ケ崎中　1年）
	13	水谷　寛樹	（牧野原中　1年）
	14	工藤　翼	（根木内中　1年）
	15	長田　結	（根木内中　2年）
	16	吉田　香凜	（河原塚中　1年）
	17	板橋　来美	（新松戸南中　1年）
	18	中川　和泉	（金ケ作中　1年）
	19	本田　真樹	（和名ケ谷中　2年）
	20	羽坂　美柚	（聖徳大学附属女子中　2年）
	21	白石　優美香	（専修大学松戸中　1年）
	22	星名　優歩	（専修大学松戸中　2年）

平成２９年度

平和大使長崎派遣事業報告書

～伝えていこう　平和の尊さ

みんなの想い　鶴にのせて～

松戸市
総務部総務課

平成２９年１２月発行